

一般演題 2-2

認定施設更新を経て見えてきた当院における治療実績

小川 駿¹⁾ 平井 誠¹⁾ 加藤晃典¹⁾

遠藤汐梨¹⁾ 村田純一²⁾ 齊藤久壽²⁾

1) 医療法人 札幌麻生脳神経外科病院 臨床工学科
2) 医療法人 札幌麻生脳神経外科病院 脳神経外科

【はじめに】

当院は、2016年7月に認定施設の更新を申請した。その際、認定期間であった2013年8月1日から3年間の治療実績を作成し、初回認定時の2010年8月からの3年間の治療実績と比較したので報告する。

【背景】

当院では、SECHRIST社製第1種高気圧酸素治療装置6台を所有し、2000年7月から365日体制で土日も治療を行っている。治療を行った患者のデータは部署内のPCにて情報を管理し、当院でのHBOの経験があるか等の情報収集、認定施設更新や疾患別での分類に活用している。

【結果】

患者数1,732名(8.9%減少)、治療回数20,988回(9.1%減少)、内訳は救急的適応1,347回(0.2%増加)、非救急的適応19,641回(9.7%減少)であった(表1参照)。疾患別で見た結果、脳血管障害が27%と大きく減少していた。増加したのが開頭術後意識障害・脳浮腫、脊髄神経疾患、急性脊髄循環障害であった(表2参照)。

【考察】

表1より治療回数は減少したが、救急的適応の患者数が微増であったことから、収入減少の影響も最小限に留めることができた。表2より脳血管障害の減少は、病床の一部を回復期リハビリテーション病棟へ変更したことによる受け皿の減少が要因の一つと言える。脳塞栓に関しては、入院後早い段階で治療を実施しているため、若干の減少に留まったと考えられる。さらに医師の指示が出た時点で非救急的適応でも、後日救急的適応に変更となるケースも少なくなく、患者数あたりの救急的適応の平均回数が5.7回であった。脊髄神経疾患の増加は、治療後の症状軽快から一定期

間経過したのち、症状増悪時に再度治療を開始する患者が増加した。

また、開頭術後の脳浮腫に対して積極的に治療を施行したことも、救急的適応数の維持に繋がっていると考えられる。

【結語】

これまでどおり6台の装置を有効活用しつつ、さらに救急的適応の数を維持することが、今後も肝要であると言える。治療開始時は非救急的適応でも、後日救急的適応に変更された場合もあったので、入院後早い段階から治療を行うことが重要である。

表1 保険適応数の比較

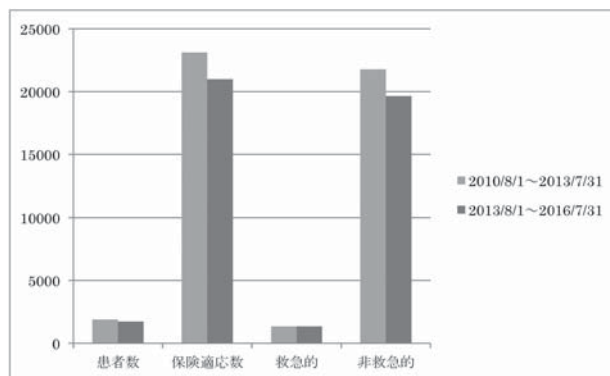


表2 疾患別での回数の比較

